

明和学園短期大学 令和元年度 学修成果に係る自己評価アンケートの分析 (卒業時アンケート)

本アンケートは、在学2年間の学生自身の「専門科目（講義）」「専門科目以外」「専門科目（実習・演習）」にかかる学修の振り返りである。それぞれの項目ごとに、4つの選択肢の中から自分に一番近いと思われるものを回答する形式で行った。

本学での学修成果について、あなた自身の取り組みを「専門科目（講義）」「専門以外の科目」「実習・演習」それぞれについて、次の設問ごとに、「4：大いに当てはまる 3：まあまあ当てはまる 2：あまり当てはまらない 1：当てはまらない」から該当するものに○をつけてください。

実施年月：令和2年1月

調査対象：令和元年度2年次 卒業見込み学生 74名
(こども学専攻 31名・栄養専攻 43名)

アンケート回収率：100%

1 「専門科目（講義）」について

「将来、役立つ知識・技能が得られた。」(こども学 3.8、栄養 3.5) から、専門科目において将来に役立つ知識・技能が得られたことを実感している学生が多いことがわかる。また、授業（講義）では知識・技能の習得だけでなく、その活用まで考えた授業が行われていることが、「考えたり、判断したり、表現したりすることが求められる授業があった。」(こども学 3.8、栄養 3.5)、「課題解決にむけて自主的に他の者と協力して取り組む授業があった。」(こども学 3.7、栄養 3.3) という設問に対する高い数値からもうかがえる。

本学のシラバスには、事前・事後の学修でやってほしいことや、そのために必要な時間などが明記されている。学生には、基本的に2単位15回の授業（講義）だけでなく、予習、復習がセットになって到達目標を達成できることが示されている。教員は、授業を通して予習・復習の必要性を意識させるよう努めている。本学では、知識の伝達のみの一方向的な授業を脱却し、双方向型のアクティブ・ラーニング手法を用いて、知識を活用しながら思考力・判断力・表現力などを育むための授業に転換すべく全学的に取り組んでいる。

予習で授業の見通しをもち、復習で授業を振り返ることを習慣づけることも目標達成の一環として捉えているが、「ほとんどの科目で予習を行った。」(こども学 2.3、栄養 2.2)、「ほとんどの科目で復習を行った。」(こども学 2.5、栄養 2.5)、「シラバスで示された授業外学修に積極的に取り組んだか。」(こども学 3.2、栄養 2.8) とそれぞれ低い数値であった。学生自身の進路に対する意識、専門的な知識を身に付けようとする学ぶ意欲の低さ、授業に対する受け身の姿勢などに起因すると思われる。授業そのものだけでなく、事前・事後の学修の重要性を学生に認識してもらうことが大きな課題である。

「ほとんどの科目で、学修内容を理解することができた。」(こども学 3.6、栄養 3.0)、「授業内容を理解できない科目があった。」(こども学 2.5、栄養 2.5) から、栄養はこども学に比べて習得すべき知識の

量や内容が大きな負担となっているのではないかと推測される。ここでも、授業の事前・事後学修の重要性が浮かび上がってくる。

資格を目指す短期大学として履修すべき授業が多いこともあり、予習・復習にあまり負担をかけないように授業に取り組んでいるのか、それぞれの授業が本質的に思考力・判断力・表現力などを育むところまで深まっていないのか検証し授業改善につなげる必要がある。

2 「専門以外の科目」について

「考えたり、判断したり、表現したりすることが求められる授業があった。」(こども学 3.7、栄養 3.3)、「課題解決にむけて自主的に他の者と協力して取り組む授業があった。」(こども学 3.7、栄養 3.1)と比較的高い数値を示しており、授業のやり方としては、知識を活用し、思考力・判断力・表現力などを育てるという観点で工夫がみられることがわかる。

専門科目と同様に「ほとんどの科目で予習を行った。」(こども学 2.4、栄養 2.3)は低い数値であるが、「シラバスで示された授業外学修に積極的に取り組んだか。」(こども学 3.4、栄養 2.8)、「ほとんどの科目で積極的に取り組めた。」(こども学 3.5、栄養 3.1)から、授業への姿勢や意欲は学生なりに取り組んでいることがうかがえる。授業内容の理解度では「ほとんどの科目で、学修内容を理解することができた。」(こども学 3.6、栄養 3.0)となっている。

専門以外の科目について、内容的には高校までに学習しなかった新しいものが多かったはずだが、「高校までに履修していない内容を前提とする科目があった。」(こども学 2.7、栄養 2.7)、「授業内容を理解できない科目があった。」(こども学 2.8、栄養 2.5)は意外にも低い数値であった。

3 「専門科目 (実習・演習)」について

「関連する講義が役に立った。」(こども学 3.8、栄養 3.6)、「将来、役立つ技術を修得することができた。」(こども学 3.8、栄養 3.5)、「主体的に取り組んだ。」(こども学 3.7、栄養 3.3)、「実習・演習で実行力が身に付いた。」(こども学 3.7、栄養 3.4)、「計画性が身に付いた。」(こども学 3.6、栄養 3.2)、「協働して取り組むことができた。」(こども学 3.7、栄養 3.4)と、どの項目も高い数値であった。本学の学生は、実習や演習に対して、全般的に興味・関心が高く、また能動的であり、これらを通して様々なことを身に付けていることがわかる。

4 まとめ

本学の学生は、知識を伝達する一方向型の講義形式の授業形態では知識を習得するやり方を苦手としていることがわかる。双方向型のアクティブ・ラーニング等を活用し、思考力・判断力・表現力などを育むための授業に転換すべきである。他方、実習・演習などの体験を通して学ぶ形式を好み、また得意としている。知識を基盤とした応用力・活用力をしっかりとさせるという観点が大切である。

基礎から系統的に積み上げる学習法だけでなく、実験や実習等の体験型の学修を併用しながら、本学にあった習得や定着の仕方を工夫していくことが大切である。

令和元年度 学修成果に係る自己評価 アンケート集計結果

【凡例】

4:大いに当てはまる 3:まあまあ当てはまる 2:あまり当てはまらない 1:当てはまらない

I 専門科目		こども学	栄養	全体
1.	将来、役立つ知識・技能が得られた。	3.8	3.5	3.6
2.	考えたり、判断したり、表現したりすることが求められる授業があった。	3.8	3.5	3.7
3.	ほとんどの科目で、学修内容を理解することができた。	3.6	3.0	3.3
4.	課題解決にむけて自主的に他の者と協力して取り組む授業があった。	3.7	3.3	3.5
5.	興味・関心を持って取り組めた。	3.6	3.2	3.4
6.	配布された資料が役に立った。	3.6	3.3	3.5
7.	ほとんどの科目で積極的に取り組めた。	3.4	3.1	3.2
8.	シラバスで示された授業外学修に積極的に取り組んだ。	3.2	2.8	3.0
9.	授業内容を理解できない科目があった。	2.5	2.5	2.5
10.	ほとんどの科目で予習を行った。	2.3	2.2	2.3
11.	ほとんどの科目で復習を行った。	2.5	2.5	2.5
12.	高校までに履修していない内容を前提とする科目があった。	2.9	2.9	2.9

II 専門以外の科目

1.	将来、役立つ知識・技能が得られた。	3.8	3.4	3.5
2.	考えたり、判断したり、表現したりすることが求められる授業があった。	3.7	3.3	3.5
3.	ほとんどの科目で、学修内容を理解することができた。	3.6	3.0	3.3
4.	課題解決にむけて自主的に他の者と協力して取り組む授業があった。	3.7	3.1	3.3
5.	興味・関心を持って取り組めた。	3.5	3.2	3.3
6.	配布された資料が役に立った。	3.5	3.2	3.4
7.	ほとんどの科目で積極的に取り組めた。	3.5	3.1	3.3
8.	シラバスで示された授業外学修に積極的に取り組んだ。	3.4	2.8	3.0
9.	授業内容を理解できない科目があった。	2.8	2.5	2.6
10.	ほとんどの科目で予習を行った。	2.4	2.3	2.4
11.	ほとんどの科目で復習を行った。	2.5	2.5	2.5
12.	高校までに履修していない内容を前提とする科目があった。	2.7	2.7	2.7

III 実習・演習

1.	関連する講義が役に立った。	3.8	3.6	3.7
2.	将来、役立つ技術を修得することができた。	3.8	3.5	3.6
3.	主体的に取り組んだ。	3.7	3.3	3.5
4.	実習・演習で実行力が身に付いた。	3.7	3.4	3.5
5.	計画性が身に付いた。	3.6	3.2	3.3
6.	協働して取り組むことができた。	3.7	3.4	3.5

明和学園短期大学 平成30年度 学修成果に係る自己評価アンケートの分析 (卒業時アンケート)

本アンケートは、在学2年間の学生自身の「専門科目（講義）」「専門科目以外」「専門科目（実習・演習）」にかかる学修の振り返りである。それぞれの項目ごとに、4つの選択肢の中から自分に一番近いと思われるものを回答する形式で行った。

本学での学修成果について、あなた自身の取り組みを「専門科目（講義）」「専門以外の科目」「実習・演習」それぞれについて、次の設問ごとに、「4：大いに当てはまる 3：まあまあ当てはまる 2：あまり当てはまらない 1：当てはまらない」から該当するものに○をつけてください。

実施年月：平成31年1月

調査対象：平成30年度2年次 卒業見込み学生 69名
(こども学専攻 35名・栄養専攻 34名)

アンケート回収率：100%

1 「専門科目（講義）」について

専門科目（講義）の授業についての課題は、学生の側からすると、将来の自身の進路に直結する専門科目を学ぶ場でありながら、予習・復習など事前・事後の学修を行っている学生の割合が低いことである。

たとえば、「ほとんどの科目で予習を行った。」(こども学 1.9、栄養 2.4)、「ほとんどの科目で復習を行った。」(こども学 2.2、栄養 2.6)、「シラバスで示された授業外学修に積極的に取り組んだか。」(こども学 2.7、栄養 2.7) とそれぞれ低い数値であった。

これは、学生自身の進路に対する意識、専門的な知識を身に付けようとする学ぶ意欲の低さ、授業に対する受け身の姿勢などに起因していると思われる。

シラバスには、それぞれの科目を担当する教員が事前・事後の学修でやっておいてほしいことや、そのために必要な時間などが明記されている。学生には、基本的に2単位15回の授業（講義）、予習、復習が3点セットになっており、講義だけ受講しても到達目標に達しないことを理解させる必要がある。教員は、予習・復習の必要性を、授業を通して意識させるような工夫、例えば、シラバスを開かせ、次回の講義の予告と調べておく事項を提示するなど、が必要と思われる。知識の伝達のための授業から脱却し、知識を活用しながら思考力・判断力・表現力などを育むための授業に転換する上では、予習で授業の見通しをもち、復習で授業を振り返ることを習慣づける工夫が必要である。

「授業内容を理解できない科目があった。」(こども学 2.6、栄養 3.0)、「ほとんどの科目で、学修内容を理解することができた。」(こども学 3.1、栄養 2.8) という結果については、数値的に見ると、栄養はこども学に比べると、習得すべき知識の量が多いので予習や復習をしないと授業を理解できないのか、知識を伝達する一方向の講義型の授業のために学生が受け身になっているのか、今後分析をしていく必要がある。

本学の場合、履修すべき授業が多いこともあり、予習・復習にあまり負担をかけないように配慮しなが

ら授業をしているのか、それぞれの授業が思考力・判断力・表現力などを育むところまで深まっていないのかをさらに検証する必要がある。

「将来、役立つ知識・技能が得られた。」という設問に対して、高い数値（こども学 3.6、栄養が 3.5）が出ている。専門科目において将来に役立つ知識・技能が得られたことを実感している学生が多かったことが伺える。

「考えたり、判断したり、表現したりすることが求められる授業があった。」（こども学 3.6、栄養 3.4）、
「課題解決にむけて自主的に他の者と協力して取り組む授業があった。」（こども学 3.4、栄養 3.4）と比較的高い数値であった。このことから、授業（講義）について、知識・技能の習得だけでなく、その活用まで考えた授業を各先生が工夫して行っていることがわかる。

2 「専門以外の科目」について

「シラバスで示された授業外学修に積極的に取り組んだか。」（こども学 2.7、栄養 2.7）、「ほとんどの科目で予習を行った。」（こども学 2.8、栄養 2.7）、「ほとんどの科目で積極的に取り組めた。」（こども学 2.3、栄養 2.5）とともに低い数値であった。それにもかかわらず、「ほとんどの科目で、学修内容を理解することができた。」（こども学 3.4、栄養 3.3）となっている。

「高校までに履修していない内容を前提とする科目があった。」（こども学 3.6、栄養 3.6）と高い数値であった。一方で、「授業内容を理解できない科目があった。」（こども学 2.3、栄養 2.5）は低い数値であった。

専門以外の科目については、自己評価アンケートによると、内容的には高校までに学習しなかった新しいものが多かったにもかかわらず理解できたと応える学生の割合が多かった。

授業のやり方としては、「考えたり、判断したり、表現したりすることが求められる授業があった。」（こども学 3.4、栄養 3.1）、「課題解決にむけて自主的に他の者と協力して取り組む授業があった。」（こども学 3.1、栄養 3.2）と比較的高い数値を示しており、知識を活用し、思考力・判断力・表現力などを育てるという観点で授業が工夫されていたように見受けられる。

3 「専門科目（実習・演習）」について

「関連する講義が役に立った。」（こども学 3.3、栄養 3.2）、「将来、役立つ技術を修得することができた。」（こども学 3.4、栄養 3.3）、「主体的に取り組んだ。」（こども学 3.4、栄養 3.1）。「実習・演習で実行力が身に付いた。」（こども学 3.6、栄養が 3.3）、「計画性が身に付いた。」（こども学 3.3、栄養 3.2）「協働して取り組むことができた。」（こども学 3.4、栄養 3.3）と、どの項目も高い数値であった。本学の学生は、実習や演習に対して、全般的に興味・関心が高く、また能動的であり、これらを通して様々なことを身に付けていることがわかる。

4 まとめ

本学の学生は、講義形式よりも実習・演習などの体験を通して学ぶ形式を好み、また得意としている一方、知識を伝達・注入する一方向型の講義形式の授業形態で知識を習得するやり方を苦手としていることがわかる。ただし、知識を習得することは、知識を活用するための基盤をしっかりとさせるという観点から大切なことである。

知識・技能を、例えば、実習・演習などの体験を通しての失敗や必要性を感じたタイミングで習得させるなど、必ずしも基礎から系統的に積み上げ型で習得させるのではなく、必要感を持たせながら学習させるなどの、本学にあった習得や定着の仕方を工夫していくことが必要である。

平成30年度 学習成果に係る自己評価 アンケート集計結果

I 専門科目

	こども学	栄養	全体
1. 将来、役立つ知識・技能が得られた。	3.6	3.5	3.6
2. 考えたり、判断したり、表現したりすることが求められる授業があった。	3.6	3.4	3.5
3. ほとんどの科目で、学修内容を理解することができた。	3.1	2.8	3
4. 課題解決にむけて自主的に他の者と協力して取り組む授業があった。	3.4	3.4	3.4
5. 興味・関心を持って取り組めた。	3.4	3.2	3.3
6. 配布された資料が役に立った。	3.3	3.4	3.3
7. ほとんどの科目で積極的に取り組めた。	2.9	3	3
8. シラバスで示された授業外学修に積極的に取り組んだ。	2.7	2.7	2.7
9. 授業内容を理解できない科目があった。	2.6	3	2.8
10. ほとんどの科目で予習を行った。	1.9	2.4	2.1
11. ほとんどの科目で復習を行った。	2.2	2.6	2.4
12. 高校までに履修していない内容を前提とする科目があった。	3	2.9	2.9

II 専門以外の科目

1. 将来、役立つ知識・技能が得られた。	3.2	2.9	3.1
2. 考えたり、判断したり、表現したりすることが求められる授業があった。	3.4	3.1	3.2
3. ほとんどの科目で、学修内容を理解することができた。	3.4	3.3	3.3
4. 課題解決にむけて自主的に他の者と協力して取り組む授業があった。	3.1	3.2	3.1
5. 興味・関心を持って取り組めた。	3.2	3.1	3.2
6. 配布された資料が役に立った。	2.7	2.8	2.7
7. ほとんどの科目で積極的に取り組めた。	2.6	2.7	2.6
8. シラバスで示された授業外学修に積極的に取り組んだ。	2.1	2.4	2.2
9. 授業内容を理解できない科目があった。	2.3	2.5	2.4
10. ほとんどの科目で予習を行った。	2.8	2.7	2.8
11. ほとんどの科目で復習を行った。	3.5	3.5	3.5
12. 高校までに履修していない内容を前提とする科目があった。	3.6	3.6	3.6

III 実習・演習

1. 関連する講義が役に立った。	3.3	3.2	3.2
2. 将来、役立つ技術を修得することができた。	3.4	3.3	3.4
3. 主体的に取り組んだ。	3.4	3.1	3.2
4. 実習・演習で実行力が身に付いた。	3.6	3.3	3.4
5. 計画性が身に付いた。	3.3	3.2	3.2
6. 協働して取り組むことができた。	3.4	3.3	3.4